

日本語母語話者のスピーチレベルは、学習者に対してどのように変容するか —日本人学生とタイ人留学生の自然会話分析から—

猪俣公克

(原稿受理日 2004年3月24日)

1. はじめに

日本語の教科書を見ると、会話に出てくる登場人物は日本人同士であることが多い。または、文法も待遇表現も完璧な外国人が、日本人とスムーズに会話を進めていく。しかし、このような場面は、現実に日本語学習者が遭遇する場面とは程遠いものであるだろう。学習者は文法を間違えたり、待遇表現に戸惑うなど、コミュニケーションにつまずくことが十分に考えられる。一方、母語話者の方も外国人話者の不完全な能力を認識し、自分自身のコミュニケーションを適当に変容させる（ネウストブニー 1995）。ネウストブニーはさらに、日本語母語話者同士の場面（以下「母語場面」）を想定した教育にかたよる事は、学習者と日本語母語話者の場面（以下「接触場面」）に学習内容を応用できないことを指摘し、接触場面に関する研究の必要性を述べている。

接触場面の中でも、筆者は特に、日本人が学習者に対し、どのように待遇表現を用いているのかについて興味を持つようになった。直接の原因は、筆者が日本で留学生から「日本人は丁寧過ぎる」「仲良くなりたけれど、難しい」と相談を受ける事がよくあり、日本人学生がどのように学習者に接しているのかを知りたいと思ったことにある。実際の接触場面における日本人の待遇表現を提示し、その動機について考える機会を学習者に与えることができれば、日本人とのより良いコミュニケーションの手がかりになるのではないだろうか。本研究では、日本語の待遇表現の1つであるスピーチレベルに分析対象を絞り、ポライトネス理論（Brown and Levinson 1987）の枠組から考察を加えていく。ケーススタディの域であるので、過剰な一般化はできないが、日本語教育にも何らかの示唆ができればと筆者は考えている。

2. 研究の目的

1. 母語場面と接触場面における日本語母語話者のスピーチレベルについて、自然会話分析からデータを実証的に提示する。そして、両場面のデータを比較し、日本語母語話者のスピーチレベルにどのような変容が見られるかを分析する。
2. 1の結果の背後にある日本語母話者の動機について、ポライトネス理論から考察を加える。
3. 2、3と、日本語教育の関わりについて論じる。

3. 理論背景

3.1 スピーチレベルについて

「スピーチレベル」及び「スピーチレベルシフト」の研究で代表的なものには、生田・井手（1987）、宇佐美（1995 他）、三牧（1999 他）、Maynard（1991）などが挙げられる。全ての研究に共通している点は、従来の文レベルの敬語研究とは異なり、談話を分析対象としていることである。そして「スピーチレベル」とはその中における発話、または文の丁寧度のレベルを指している。スピーチレベルの研究によって、丁寧度の高い発話と比較的くだけた発話が混じっている会話の実態や、その動機についてなどが明らかにされつつある。

しかし、研究者によってその定義や分類基準は、異なっている¹。実は「スピーチレベル」という用語についても、「待遇レベル」（三牧 2001）、「敬語のレベル」（生田・井手 1983）「スピーチレベル」（宇佐美 1995）と各研究者によって用語は異なっているが、本研究では便宜上これらをすべて「スピーチレベル」、それに関する研究を「スピーチレベルに関する研究」と包括して記す。本研究では宇佐美（2001 他）の文末形式のスピーチレベル分類（4.5 参照）に従って、スピーチレベルをコーディングする。

3.2 ポライトネス理論からみたスピーチレベルについて

Brown and Levinson（以下 B&L）によって打ち立てられたポライトネス理論は、様々な研究を触発し、「ポライトネス」を扱った理論においては、現在最も包括的なものとされている（宇佐美 2001）。スピーチレベルの研究においても、ポライトネス理論の枠組みを借りた研究（宇佐美 1995 他、三牧 1997 他）が多く、本研究においてもその枠組みからの分析を行う。以下に、まずポライトネス理論の概観を述べ、スピーチレベルとの関わりについて述べる。

B&L によれば、人間は、理解、共感されたい欲求としての「ポジティブ・フェイス」と、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求としての「ネガティブフェイス」を持っている。この二つのフェイスは人間の基本的な欲求であり、他者との相互関係において、この二つのフェイスを脅かさないように配慮することを、ポライトネスと呼ぶ。

それぞれポジティブフェイスに配慮した行為をポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブフェイスに配慮した行為をネガティブ・ポライトネス・ストラテジーという。例えば、「お前さー」のような一見乱暴に聞こえる言語行為でも、仲の良い友達同士で使われるなら、「理解、共感されたい」という相手のポジティブフェイスを満たすポジティブ・ポライトネス・ストラテジーになりうる。

しかし「お前さー」のような発話は相手が初対面や目上の場合には、逆に相手のフェイスを脅かす行為になってしまうだろう。このようなフェイスを脅かす行為は、FTA（Face Threatening Act）と

¹ 詳細については、猪俣（2001）を参考されたい。

呼ばれているが、どのような要因が相手のフェイスの侵害度を決定するのだろうか。B & Lはその要因を以下のように公式化して提示している²。

$$W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$$

W_x = Weigh (フェイスの侵害度)

D = Distance (話し相手との社会的距離)

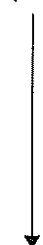
P = Power (両者の相対的力)

R_x = Rank of imposition (負荷度《その文化においてある行為が意味する負担の割合》)

() 内の S は話し手、 H は聞き手を表す。

つまり、話し手や聞き手のポライトネス・ストラテジーの動機を探るためには、三つ要因を明らかにする必要がある。また、フェイスの侵害度が大きいほど、話し手は下図にある高い番号のストラテジーを選択する。

フェイスの侵害度 (小)



(大)

- ① FT (Face threat) の軽減を行わず、直接的な行動を取る。
- ② ポジティブ・ポライトネス
- ③ ネガティブ・ポライトネス
- ④ 伝達意図を明示的に表さない (ほのめかす)
- ⑤ FTA (Face threatening act) を行わない。

宇佐美 (2001) より引用

ポライトネス理論から、従来行われてきた日本語における文レベルの膨大な敬語研究 (宇佐美 2001) を捉えると、③のネガティブポライトネスを対象とした研究と位置付けられる。つまり、膨大な量の研究の焦点が、ポライトネス理論からみると、5つのストラテジーの一つに偏っているのである。実際の日本人同士の会話では、敬語使用と常体、または敬語不使用の混合が見られる (生田 1983、Maynard 1991、宇佐美 1995 他)。例えば、敬体から常体に文体をシフトして、心的距離を縮める (三牧 1997) ポジティブ・ポライトネスストラテジーも会話では使われている。

このことから、日本語の待遇表現の実態を知るためには、スピーチレベルというより広い対象が必要であり、話者のスピーチレベル選択の動機をより広い観点から分析するために、ポライトネス理論が必要であるといえる。

²Power, Distance, Rank of Imposition のそれぞれの訳語は宇佐美 (2001) を参考にした。

4. 方法

4.1 実験計画

本研究では、「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」（宇佐美 1997 他）の大枠に従い、実験計画を組み立てた。他の要因を保った際の、ある統制された要因に応じた言語使用の「変容」に着目する方法は、個々の要因の働きを明確にする事に繋がり、複雑に絡み合っている諸要因を解きほぐしていくという特性がある（宇佐美 1995）。統制する要因は、ポライトネス理論で示された 3 要因である。本研究では、全会話を初対面である事で「社会的距離」、「負荷度」の条件を一定に保ち、全ての日本人インフォーマントを「同学年」に統制することで、「力関係」の統制を試みた。

また、「性」の要因がスピーチレベルに影響を与える（宇佐美 1995 他）ため、インフォーマント全員を「女性」に統一した（同性である方が、よりリラックスして会話ができるとも考えたため）。

表 A 実験計画

言語行動に影響 を与えると考 えられる要因 (B&L1987)	力関係 (Power)	社会的距離 (Distance)	負荷度 (Rank of Imposition)
統制条件	同世代・学生 (=)	初対面 (=)	初対面の会話 (=)

上の要因を統制した上で、日本人同士の会話（母語場面）と、学習者との会話（接触場面）におけるスピーチレベルを比べ、どのような変容がみられたかを実証的に提示する。

4.2 インフォーマント

日本人母語話者のベースインフォーマント（JNB《Japanese Native Base》）として、東京外国語大学の三学年に所属する女性合計 9 人に協力していただいた。ベースインフォーマントには、接触場面と母語場面でそれぞれ一回ずつ会話をしていただいた。

表 B 日本人ベース＜JNB 1－9＞

日本人ベース	年齢	性別	学年	出身地	1 年以上の 海外滞在歴
JNB 1	20 歳	女性	第 3 学年	東京都	なし
JNB 2	23 歳	女性	第 3 学年	東京都	中国（1 年間）
JNB 3	21 歳	女性	第 3 学年	東京都	なし
JNB 4	21 歳	女性	第 3 学年	埼玉県	なし
JNB 5	20 歳	女性	第 3 学年	愛知県	なし
JNB 6	20 歳	女性	第 3 学年	東京都	シンガポール （一年間）
JNB 7	20 歳	女性	第 3 学年	神奈川県	なし
JNB 8	20 歳	女性	第 3 学年	東京都	なし
JNB 9	20 歳	女性	第 3 学年	東京都	なし

ベースインフォーマントの対話者になる日本人（以下JNI《Japanese Native Interlocutor》）として、東京外国語大学3学年の女性3人に協力していただいた。JNI1はJNB1, 2, 3と、JNI2はJNB4, 5, 6と、JNI3はJNB7, 8, 9とそれぞれ会話を一回ずつしていただいた。会話は合計で9組収集された。（以下表C参照）

表C 日本人対話者＜JNI1-3＞

日本人ベース	年齢	性別	学年	出身地	1年以上の海外滞在歴
JNI1	20歳	女性	第3学年	神奈川県	なし
JNI2	22歳	女性	第3学年	岩手県	なし
JNI3	20歳	女性	第3学年	広島県	なし

接触場面の学習者インフォーマントとして、タイ人女性、NEEN（ネーン）とWIU（ウィウ）の二人に協力していただいた。二人とも年齢は21歳、タイのシーナカリン大学で日本語を3年間副専攻した後、留学のため、2000年8月に来日した。二人にとって初めての訪日であった。二人は当時東京外国語大学のプログラム‘ISEP’で中級クラスに所属していた。また筆者自身がWIU、NEENと会話をしてみて、初級項目は理解できていることから、日本語能力は中級と判断した。WIUとNEENには、ベースインフォーマント9人すべてと、一回ずつ会話をしていただいた。会話は合計で18組収集された。（以下表D参照）

表D 学習者（WIU、NEEN）

学習者ベース	年齢	性別	出身地	タイでの学年	日本語能力	来日回数
NEEN	21	女性	バンコク	第4学年	中級	1回
WIU	21	女性	バンコク	第4学年	中級	1回

4.3 実験手続き

各会話は東京外国語大学院生控え室において、約15分間録音された。被験者には、「懇談会などのパーティーで隣り合った人などを想定して会話して下さい。」というインストラクションを出すなどして、なるべく自然な会話になるように努めた。（全会話数27組、各会話10分間が文字化され、合計270分の会話が文字化された。）会話は2001年10月から約半年間の内に収集された。

実験が終わった直後に、それぞれの被験者にフォローアップアンケート（宇佐美1997）を記入していただいた。質問項目は「録音を意識したか」「相手の年齢についてどう思ったか」「相手の方は初対面として話しやすかったか」「自然に話せたと思うか」などについて5段階評価で回答できるようになっている。また実験に対する感想・意見については自由記入欄を設けた。回答において「会話が非常に不自然であった」等の実験に対する否定的な結果は示されなかった。

4.4 会話の文字化

以下データの文字化において参照した、「文字化の原則」（宇佐美 1997）中、特に重要と思われる部分を引用する。

1) 改行法について

基本的に、話者が変わるたびに改行する。また、同一話者が複数の「発話文」を続けて話すときは、「発話文」ごとに改行する。ここでは、会話という相互作用の中における「文」を「発話文」と呼ぶ。より詳しい定義は後出。これは、敬語を含むか含まないかなど、構造的な「文」単位でコーディングする必要があるものが多いため、ラインごとにコーディングができるようにするためである。また、話者の発話に重なる短い、小声のあいづち（ええ、ええ、ふーん等）は、それが相互作用において、相手の話を聞いているということを示す以上の積極的な機能を持たない限り、（ ）に入れて、発話中の最も近いと思われる場所に挿入する。

ただし、あいづちの中でも、話者の発話と重ならないものや理解や感嘆などを示すなどの積極的な機能を持っていると判断されるものは、改行して1ライン取る。

2) 「発話文」の定義

「発話文」は以下のように定義する。

実際の会話における話し言葉では、いわゆる文中にあいづちが入ったり、文末が省略されていたりすることが多い。また、文法的には1単語に相当するものが、実質的機能を担っていたりする場合もある。よって、ここでは、いわゆる「一語文」や、述部が省略されているもの、あるいは最後まで言い切られていないものなども、「1発話文」として扱い、発話文ごとに改行する。ただし、何かを思い出そうとする時などに用いられる、「フィラー」としての「そうですねえ」などは、「あのう」などと同じく、後続部とまとめて1発話文と数える。

また逆に、途中で相手のあいづちなどが入って、話者がいったん交代してラインが変わっても、同一話者によって発せられた、構造的に「文」を成していると捉えられるものは、それら改行をまとめて「1発話文」と数える。これは、敬語使用率をみるなど「文」単位でコーディングするほうが便利なためである。

4.5 スピーチレベルのコーディング

本研究は日本語において対人機能が最も反映される文末表現（菊地 1989）に焦点を当て、スピーチレベルの分類を行う。コーディングは宇佐美（2001）の文末形式のスピーチレベルに従った。³以下、分類基準と例を挙げる。

³ 宇佐美の一連の研究（1995 他）では、文中と文末、形式と機能面がコーディングされている。

- [P] (Polite) 文末に敬体を含む発話
- [N] (Neutral) 文末に常体を含む発話
- [NM] (No Marker) 文末に丁寧度を示すマーカーがない発話（応答詞、中途終了発話等。）

<例>

発話ライン	話者	発話内容	スピーチレベル
7	JNB2	日本には、1年間いるんですか？	P
8	NEEN	うん。	NM
9	JNB 2	そっか、タイ人ね、じゃ、「人名」さんって知ってる？	N

5. 結果

以下、接触場面と母語場面で会話をした日本人ベースのスピーチレベルがどのように変容したかについて、図を参照しながら述べていく。

5.1 文末に敬体を含む発話【P】

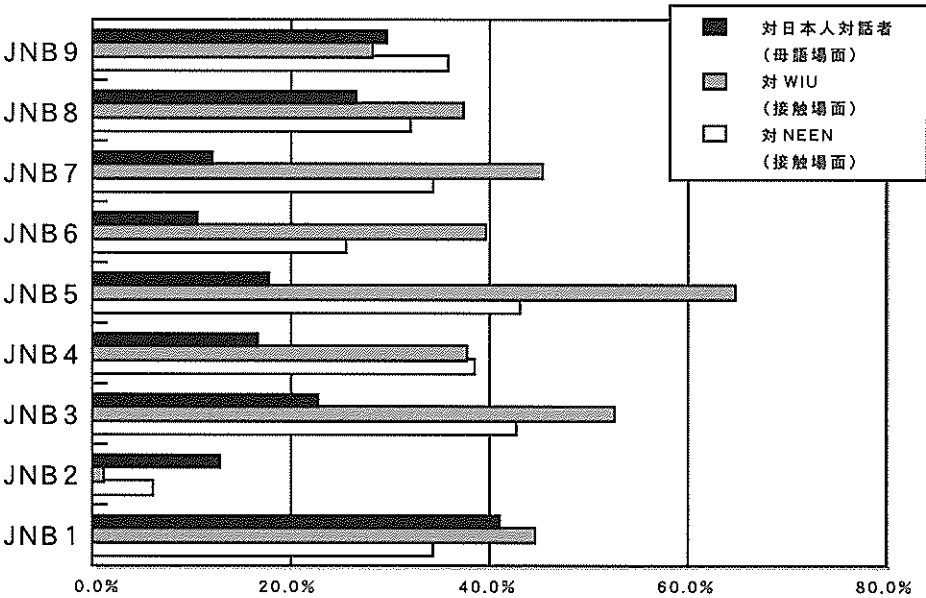


図 A 日本人ベースの自己総発話数 に占める、文末に敬体を含む発話 [P] の割合

まず、図 A の接触場面における数値をみると、9 人中 7 人の敬体 [P] の割合値が母語場面と比べて高いことが示されている。

上の一つの要因として、接触場面における「話題の展開」が母語場面とは大きく異なっていることが考えられる。文字化された会話データを詳細に見ると、母語場面ではベースと対話者が同じ大学出身

⁴ 1 回の会話における、自分の発話の総数を指す

なので、「大学祭」「共通の知り合い」「サークル」などの共通の話題へ展開することが多くみられた。これは、大学生初対面会話においては、共通点を積極的に模索し話題化する行動がみられるという研究結果（三牧 1999）と一致している。それに対し接触場面では、ベースと学習者の背景の違いから、共通の話題を探ることが難しくなっている傾向がよくみられた。例えば、接触場面における話題をみると、「タイについて」「東京外国語大学における留学生のプログラムについて」「滞在期間について」等の学習者志向の話題が増え、日本人の方が質問をする事が多くなっていた。三牧（1999）は話題選択のストラテジーとして、「(対話者との) 相違点への関心表明」を挙げていて、相手に関心を示すポジティブポライトネス・ストラテジーであると述べている。しかし一方でこの行動は、相手の個人的情報に言及するために、フェイス侵害度が高くなる行為であるともいえる。フェイス侵害度が高まれば、ポジティブポライトネスよりもネガティブポライトネスが優先され、それが本研究で見られた接触場面における敬体 [P] 増加につながったのではないだろうか。

また、一つの話題がどのように展開するのか、という点においても母語場面と接触場面では相違がみられた。具体例として、JNB3 の両場面における会話の一部を以下に挙げる。

会話例 a 接触場面 (JNB3 対 WIU 1)

77	JNB3	え、タイ料理、外語祭で (あ) タイ料理の料理を食べてました。	P
78	WIU	えと、何年生ですか？	P
79	WIU	タイ料理は一年生、二年生、三年生がありました。	P
80	JNB3	何年生？	NM
81	JNB3	えっと私は一年生のを食べて。	N
82	WIU	あー二年生は食べていません？	P
83	JNB3	食べてないですね。	P
84	WIU	残念だね。	N
85	WIU	私は二年生のを手伝いました。(あ)。	P
86	WIU	おいしい、かなー？	N
87	JNB3	あー、そっか、あの、サークルのタイ科の後輩がタイ科で、んで毎日食べに行ってた。	N
88	WIU	いいですね。	P
89	JNB3	結構美味しいですよ、タイ語科の料理。	P
90	WIU	ありがとうございます。	P
91	JNB3	うん、カレーとか病み付きになっちゃいました。	P
92	WIU	はいー、私も大好きです。	P
93	JNB3	タイでもカレーは毎日食べてるものなんですか？	P
94	JNB3	／沈黙 2 秒／えっとカレーは毎日食べてるんですか？	P

会話例 b 母語場面 (JNB3 対 JN11)

53	JN11	[学園祭について] 前のほうが良かった。	N
54	JNB3	前のほうが<良かったー。>{<}	N
55	JN11	<全然良かったー、うん。>{>}	N

56	JNB3	なんかみんなの全然凝り方が、(うん) 凝ってなくて。	N
57	JNB3	そうそうそう。	NM
58	JNI1	ちょっとがっかり。	N
59	JNI1	なんかタイ科とかすっごいしくて、でなんか先生も先生でなんか、料理の 面倒をみなかったらしく (うん) 料理もまずいって有名で、は一とか思って。	N
60	JNB3	でも私毎日タイ科のカレー、食べに<行って……。>{<}	NM
61	JNI1	<食べてましたー (笑、) >{>} あれはまずいって噂だったんですけどどう でした？。	P
62	JNB3	いや、結構日によって味は変わったけど、(JNI 1 笑い) 美味しい時は美味し かったから一列にそんなに気にならなかったけど、うん<笑い>。	N
63	JNI1	人数減ったっていうのもあるん<でしょう。>{<}	NM
64	JNB3	<あー。>{>}	NM
65	JNI1	多分。	
66	JNI1	うちの時 20 人ぐらいで、次の年から 5 人ぐらい減ったんですよー、タイ科。	P
67	JNI1	だから一人数いないと無理じゃないですか。	P
68	JNB3	うん。	NM

<この後も、同話題で会話は続く>

会話例 a は接触場面、b は母語場面で、外語祭 (東京外国語大学の大学祭) という同じ話題が出ている箇所である。まず発話数を見ると、接触場面 (例 a) では 12 ラインで終わっているのに対し、母語場面 (例 b) ではその後も話題は続き、合計で 84 ラインにまで及んでいる。次に、会話 a ではオーバーラップ (相手の発話が終わっていないのに、自分の発話を重ねる事。文字化の際には< >で表示。) が頻繁に起きている。テープを聞いてみると、母語場面ではこのオーバーラップにより、話しがはずんでいる印象をうける。しかし、接触場面の会話例 b では、オーバーラップは全くおこっていない。このことが接触場面において一つの話目が展開されにくいことがわかる。

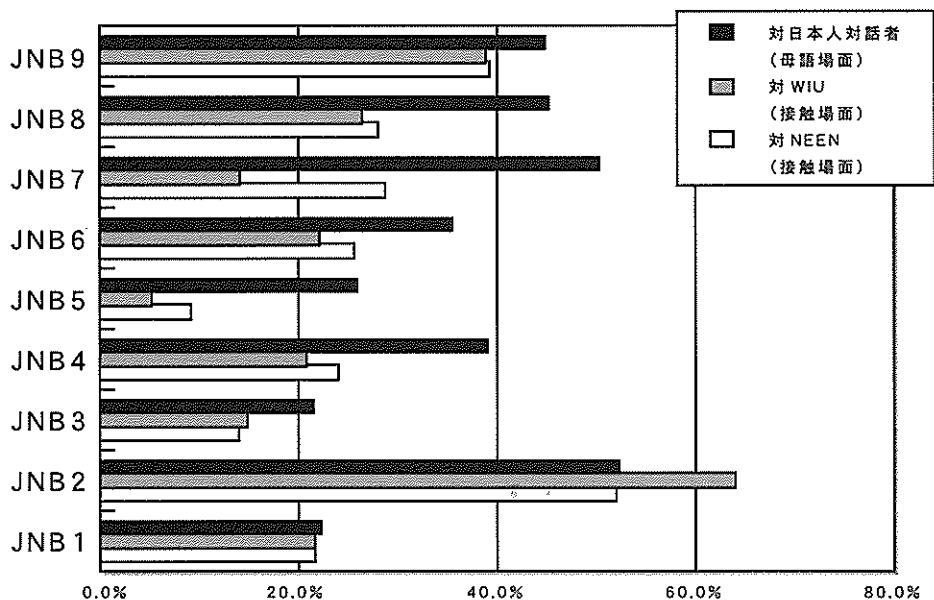
スピーチレベルを見ると、JNB3 は接触場面 (例 a) では敬体 [P] を多く使用しているのに対し、母語場面 (例 b) では JNB1 に同意したり、相槌を打つなどをして、常体 [N]、マーカーのない発話 [NM] の使用が多くなっている。このことと、発話数、オーバーラップをあわせて考えると、一つの話目が展開されにくいためにはお互いの「距離」が広がり、フェイス侵害度がより高い場面が形成されたと考えられる。そのため接触場面においては、敬体 [P] がネガティブポライトネスとしてより使用されたと考えられる。

また、会話例 a では接触場面においてフェイス侵害度が高まる別の要因をみることができる。ライン 93 をみると不自然な間があり、JN3 は W I U が自分の発話を理解しているのか確認をする必要に迫られている。このように、日本人が学習者の日本語理解を確認する発話 (自己発話のくり返しや、「わかりますか?」「知ってますか?」等の発話) は多く見られ、その際に敬体 [P] の使用が多いことが観察された。相手の理解度を確認するという行為は、フェイス侵害度が高く、それが敬体 [P] 使用率の高さに反映したといえる。

その他ベースインフォーマントの敬体[P]使用に影響している要因として、学習者とインフォーマント自身の会話スタイルや個性が考えられる。WIU自身の敬体[P]使用率は、NEENよりも明らかに高いことが観察されたが、図Aを見ると、ベースインフォーマント達はNEENよりもWIUに対し、より多く敬体[P]を使用する傾向がみられる。このことから、日本ベースは相手のスピーチレベルに合わせ、自己の発話を調整していた可能性が考えられる。つまり、学習者が敬体[P]をより多く使えば、日本人もそれにあわせて敬体[P]をより多く使用し、結果的に丁寧度の高い接触場面を形成する可能性があるといえる。しかし、NEENにより多く敬体[P]を使用したベースインフォーマントもいる。特に、JNB9はNEENに対し、WIUや日本人よりも多く敬体[P]を使用している。JNB9とNEENの会話データをみると、話題があまり展開されなく、どこことなくぎこちない印象を受ける。この場合は、お互いの個性がかみ合わないことが、JNB9の敬体[P]使用の多さにつながったと思われる。つまり、接触場面においては、傾向的に敬体[P]の使用率が増えるが、お互いの個性、会話スタイルなどその他の要因によって、その増減は変動的になることが考えられる。

最後に、JNB2は日本人に対し、より多く敬体[P]を使用しているが、JNB2は常体[N]、マーカがない発話[NM]使用が学習者に対し多くみられたために、相対的に敬体[P]が減ったと思われる。何故常体[N]、マーカがない発話[NM]が増えたのかについては、以下5.2で述べる。

5.2 文末に常体を含む発話【N】



図B 日本人ベースの自己総発話数に占める、文末に常体を含む発話【N】の割合

図 B において、日本人ベースは接触場面では、母語母面より常体 [N] を控える傾向が示されている。接触場面においては、文末に敬体を含む発話 [P] が多い傾向が示されたが、それを反映して、常体 [N] の使用率が相対的に減ったことが考えられる。しかし、その中でも JNB2 の常体 [N] 使用率が例外的に高くなっている。以下、JNB2 の両場面における会話の一部を示し、考察を加える。

会話例 c 接触場面 JNB2 対 WIU

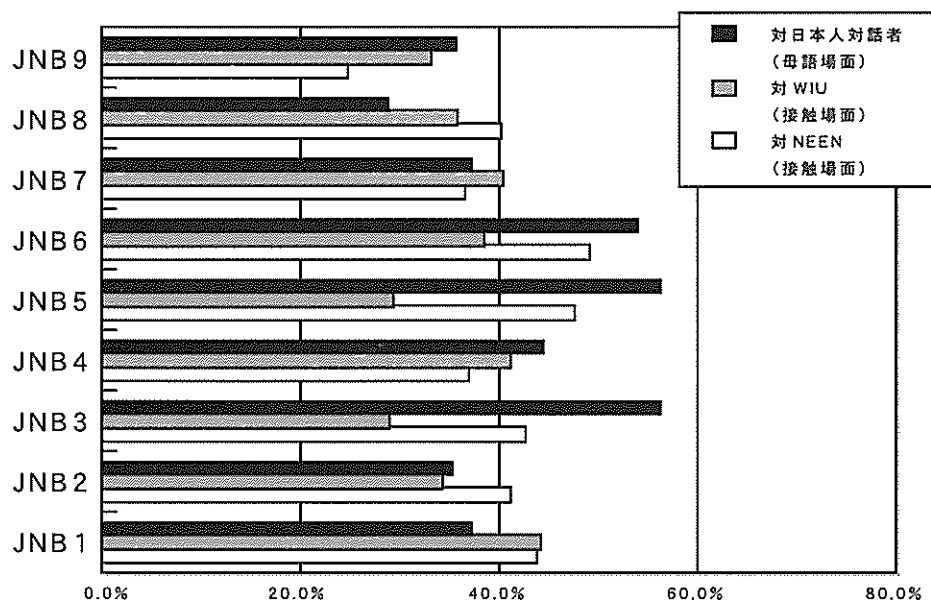
23	JNB2	え、そっか、じゃあ彼女 [NEEN] と一緒に 10 月に来たの？。	N
24	WIU	はいー、同じです。	P
25	JNB2	初めて？。	NM
26	WIU	初めてです。	P
27	JNB2	そうなんだ。	N
28	WIU	他の国も、	
29	JNB2	行った事ない？。	N
30	WIU	行った事ないです。	P
31	JNB2	本当。	NM
32	WIU	で、初めてです。	P
33	JNB2	全然違うと思う、タイと？。	N
34	WIU	はい、全然違う（違う）、です。	P
35	JNB2	ま、気候は違うしね、寒いし。	N
36	WIU	とっても寒いです。	P

会話例 c を音声データで聞くと JNB2 はゆっくり話す、相手の話しに関心を示すなど、幼児に語りかけるようないわゆる「ベビートーク」をしている。この際に JNB2 は常体 [N] とマーカーなしの発話 [NM] を多用しているが、これにより敬体 [P] で答えている WIU のスピーチレベルと非対称性が生じている。会話全体でも、このようなスピーチレベルの非対称性によって、JNB2 が力関係において上にいる印象を受ける。この接触場面では、母語話者と非母語話者という関係が「相対力」の差にあわれ、JNB2 の常体 [N] 率の高さにつながったことが考えられる。

また、JNB2 は他のインフォーマンと同じ第 3 学年であるが、留学、浪人生活を経験したため年齢が対話相手より上であった。(4.2 表 B 参照) そのため、会話において JNB1、NEEN、WIU を「自分より少し年下」と見積もっていたことが、フォローアップアンケートに書かれていた。常体 [N] は、社会人の初対面会話において、目上が目下に対してより多く使用する傾向がある (宇佐美 2001 他) ことや、先輩が後輩に対し、より常体を使用する (Olivieri 1999) など、対話者との相対力 (Power) を反映することが報告されている。このことから、JNB2 の常体 [N] の選択率の高さには、年齢という「相対力」も要因の一つであることが考えられる。

しかし、母語話者と非母語話者、年上と年下という「相対力」がどのように影響し、W I Uに対し、より多くの常体 [N] を用いるようになったのかについては、本研究でははっきりとした答えを得ることができなかった。

5.3 文末にマーカールを含まない発話【NM】



図C 日本人ベースの自己総発話数に占める、文末にマーカールがない発話【NM】の割合

上図のマーカールなし【NM】の分布には、ばらつきが見られ傾向がつかみにくいので、形式面から更に下位分類し、それぞれにおいて使い分けが見られたのかをみた。マーカールなし【NM】の発話は、「単語レベルの発話」(例：病院？、これ、など)、「文レベルの発話」(例：ちょっと用事が…など)「応答詞、フィラーなど命題内容をもたない発話」(例：うん、あの一、えーと、など)、の三つに分類された。

そのうち、日本人ベース全員が、接触場面において単語レベルの発話をより多く使用していることがわかった。以下に、接触場面で見られた単語レベルの発話の具体例を挙げ、その背景にある動機について考察を加える。

⁵ それぞれの割合値については猪俣 (2001) を参考されたい。

会話例 d 接触場面 JNB2 対 NEEN

144	JNB2	ともこ。	NM
145	NEEN	ともこ。	NM
146	JNB2	と、も、こ。	NM
147	NEEN	と、も、こ。	NM
148	NEEN	そっか、と、も、こ。	NM
150	NEEN	ネーン。	NM
151	JNB2	ネーン。	NM
152	NEEN	ネーン。	NM
153	JNB2	ネーン	NM

会話例 e 接触場面 JNB3 対 WIU

192	WIU	ドイツ、	
193	JNB3	あ、大、第2…・え？。	NM
194	WIU	German、ドイツ語、	NM
195	JNB3	ドイツゴ？。	NM
196	WIU	German、Datch、n、んー<二人笑い>	NM
197	WIU	あ、えーと、ヨーロッパ…・。	NM
198	JNB3	えっとなんとなくわかるんですけど、ごめんなさい。	P

会話例 d は会話の冒頭部で自己紹介をするシーンである。JNB2 は単語レベルの発話を連発しているが、これは NEEN の日本語の理解促進のためにしていると思われる。このような単語レベルの発話はフォーリナートークの特徴であるが、本研究の接触場面においても頻繁にみられた。

また、会話例 e ではコミュニケーションに破綻が見られ、ここでも単語レベルの発話が多くなっている。このように、単語レベルの発話で相手の発話を繰り返す、または確認することもフォーリナートークの特徴である。

以上のフォーリナートークの特徴である単語レベル発話の動機をポライトネス理論からみると、どのように解釈できるだろうか。B & L によると、非常時などには、情報交換の効率性がフェイスを配慮することよりも優先されるという。例えば、火事などの時は、「火事でございますので、どうぞお逃げ下さい。」といった相手のフェイスを配慮する発話よりも、「火事！」という発話が優先されるだろう。これはフェイス侵害度の軽減を行わず、直接的な行動を取るストラテジー（3.2 参照）となる。接触場面において、コミュニケーションの破綻が深刻なとき、または日本人が学習者の日本語の理解力に確信が持てないときは、一種の非常時と同じで、情報交換の効率性がフェイス配慮よりも優先されると考えられる。このことが単語レベルの発話の増加につながったのではないだろうか。よって、学習者の日本語能力があがれば、日本人の単語レベルの発話は減少することが考えられる。

最後に、「文レベルの発話」「応答詞、フィラーなど命題内容をもたない発話」については、インフォーマントによってばらつきがあり、傾向がつかめなかった。

5.4 まとめと今後の課題

	対 NEEN			対 WIU		
	P	N	NM	P	N	NM
JNB1	—	—	+	+	—	+
JNB2	—	—	+	—	+	—
JNB3	+	—	—	+	—	—
JNB4	+	—	—	+	—	—
JNB5	+	—	—	+	—	—
JNB6	+	—	—	+	—	—
JNB7	+	—	—	+	—	+
JNB8	+	—	+	+	—	+
JNB9	+	—	—	—	—	—

図D 母語場面との比較による、接触場面における各スピーチレベル使い分け⁶の分布

まず、敬体 [P] は接触場面においてより多く使用される傾向が示された。話題展開の難しさ、または学習者の日本語理解を確認しなければいけないことなどによって、相手のフェイス侵害度が高まったため、ネガティブポライトネスとして、敬体 [P] が多く使用されるようになったと考えられる。

次に、敬体 [P] と非対称的に、日本人インフォーマントの常体 [N] 使用が減ることが結果で示された。また、年齢という「相対力」が日本人の常体 [N] 使用に影響を与えることが、実験結果からも示されたが、JNB2 と学習者の接触場面においては、母語話者と非母語話者という「相対力」も影響したことが観察された。

マーカナーなしの発話 [NM] については、特に単語レベルの発話が接触場面においてより多く使われていた。これは相手のフェイスに配慮するよりも、情報交換の効率性が優先されることが多いためであると思われる。

最後に、日本人インフォーマントのスピーチレベルは、話者の個性や、相手のスピーチレベル、または学習能力に合わせるなど、ある程度可変的であることが結果によって示された。しかし、本研究ではインフォーマントが少ない事もあり、スピーチレベルの可変的な側面について十分に分析できなかった。今後、インフォーマントを更に増やして、話者の個性や相互作用という観点から、スピーチレベルを更に分析する事が必要だろう。

⁶ 日本人ベースの接触場面の各スピーチレベル割合値を母語場面と比較し、増加は+、減少は—で示している。

5.5 おわりに

最後に、本研究の結果から日本語教育に何が示唆できるのかを考え、おわりにかえたい。

接触場面においては、お互いの背景が異なることや日本語能力の問題上、コミュニケーションの破綻が多くなる。これにより相手のフェイス侵害度が高まり、敬体がより多く使用される傾向が本研究で示された。このようなフェイス侵害度が高まる場面を、具体的に学習者に提示することは日本語学習に有効であると筆者は考える。学習者は自己が遭遇する場面をある程度予想できるようになり、その背後にある言語行動の動機についても、より深い考察が可能になるのではないだろうか。さらに、自分なりの対処法について考えるきっかけにもなると思われる。

また、日本人大学生のスピーチレベルには、母語場面でも接触場面でも多様性がみられた。どのスピーチレベルを最も多く選択するのかは、話者によって異なるし、同じ話者でも対話者によって、スピーチレベル選択の優先順位が変わるケースも見られた。一方で、WIUとNEENにインタビューしたところ、それぞれ日本人のスピーチレベルについて、固定的なイメージを抱いていたことがわかった。例えば、WIUは「初対面だから、丁寧である必要があるので、敬体をつかう」「常体を使ったら、失礼になると思う」などと回答していた。このようなイメージは、日本語教育によって植えつけられた側面も多いのではないだろうか。日本語教育では、ステレオタイプのサンプルの表示ではなく、スピーチレベルを含めて、会話の多様性を提示することも必要であると筆者は考える。

さらに、フェイス侵害度が高まった時の有効なストラテジーについても、いくつか選択肢を提示する必要もあると思われる。例えば、本研究においては、話題が長く続かないことが観察されたが、学習者がこのことに自覚的になり、共通の話題を積極的に自分から模索するようになることも、一つの有効なストラテジーである。また、コミュニケーションの破綻時に、どのようなストラテジーが有効であるかについては、いくつかの教材がすでに出版されているので、これらを活用することも有効だろう。

文法と異なり、スピーチレベルは何が正しくて、何が正しくないのかを固定的なものとして提示することは難しいし、またその必要もないだろう。さらに、接触場面と母語場面は異なって当然のものであるし、学習者が日本語母語話者と同じようにスピーチレベルを操作する必要はないと筆者は考える。それよりも、お互いにとって、どのスピーチレベルが「ポライト」であるかを、状況に応じて自分から積極的に模索する姿勢が大切なのではないだろうか。日本語教育には、そのような自覚を促し、ストラテジーの選択肢を与えることなどで、学習者を手伝うことが期待される。今後の研究の更なる蓄積によって、接触場面を考慮した、より具体的な教材や教授法が開発されていくことを筆者は期待している。

引用文献

- 生田生子・井手祥子（1983）「社会言語における談話研究」『言語』12月号 第12巻、大修館
- _____（1983）「Discourse Strategyとしての敬語の機能」『機能による言葉の分析』文化評論出版
- 猪俣公克（2001）「タイ人留学生のスピーチレベル選択の習得過程について」、東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用　ースピーチレベルシフト生起の条件と機能ー」『学苑』第662号 昭和女子大学近代文化研究
- _____（1997）「基本的な文字化の原則の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディアの教材の試作』、文部省科学研究費基盤研究成果報告書
- _____（2001）「『ディスコース・ポライトネス』という観点から見た敬語使用の機能」『語学研究所論集』第6号 東京外国語大学語学研究所
- Olivieri, Claudia(1999)「イタリア人学習者の日本語におけるスピーチレベルシフト」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- 菊地康夫（1989）「待遇表現—敬語を中心に—」『講座日本語と日本語教育(特) 日本語学要説』明治書院
- ネウストブニー、J. V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 三牧陽子（1993）「待遇レベルシフトの談話分析」『AKP紀要』第3号、同志社大学
- _____（1997）「対談におけるFTA補償ストラテジー　ー待遇レベル・シフトを中心にー」『多文化社会と留学生交流』創刊号、大阪大学留学生センター
- _____（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー」『日本語教育』103号
- Brown and Levinson,S.（1987）Politeness: some universals in language usage.
CambridgeUniversity Press